

開発と人類学は相反すると思っていたので、「開発人類学」という考え方は意外だった。開発人類学の考え方には、世の中の現状として「開発」は避けられないのだから、単に開発を批判しその代替案を示さないのでは無責任である。そこで人類類のローカルでリアルな意見を開発に取り入れることで、開発によりオルタナティブな視座を加え、内側から開発を再考する必要があるというものだろう。(しかし、本当に開発は避けられないのだろうか。むしろ、開発を押し進める際に開発人類学の「人間優先の開発」というのが甘言として働くことはしないのだろうか。

第5章 開卷 コメント

・第5章を言及し、私自身が特に興味をもつのは、「2.2 文化相知主義再考」に於いて書かれたこの章である。異文化研究の中で異文化を自文化と判別し難い方法論と文化相知等に見ようとするものを含めると、異文化を研究するやり方について言及されているが、私としては、異文化への不干渉は全く尊重ではなく、研究の無条件肯定もまたちがうと思われ、互いの文化を尊重するためにはまず、相手の文化について知り、話を聞き、一度は相手の主張や考え方を認めるところが「必要」と考えらる。これは無条件ということではなく、頭ごなしに他文化を否定してこれに異文化理解の果敢はありえないので、相手の文化を否定せずに、認めたとし、それをこのことと見なせるかを述べた。畢竟「必要」と考えらる。このことは筆書きで述べた自文化を一時「忘れる」ということとつながるのではないかと思える。